

The Commonness of Local Terminologies in the Adriatic Sea and the Japan Sea : The macroscopic observation concerning oceanic and meteorological conditions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢内, 秋生 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/282

アドリア海と日本海沿岸での伝承的呼称の共通性

—気象・海象の宏観的観察から—

The Commonness of Local Terminologies in the Adriatic Sea
and the Japan Sea

— The macroscopic observation concerning oceanic and
meteorological conditions —

矢内 秋生*
YANAI Akio

概要

本論文では、アドリア海と日本海というふたつの閉鎖的な海域における人びとの自然現象に対する受容形態の比較と共通性の検討がおこなわれる。人びとはクロアチアのダルマチア沿岸と日本海沿岸のおもに漁業関係者である。対象データは、2013年6月から2014年2月までアドリア海沿岸で行った伝承的呼称の調査と1985年から1995年まで日本海沿岸で行った同様の調査で得たもので、自然現象はおもに気象および海象現象である。

これらの調査事例から、(1) 天候表現の共通性、(2) 風の強弱表現の共通性、(3) 海象表現に関する共通性、(4) 地名を使うことで得られる地域愛と優越性、実利性、(5) 自然現象の擬人化、(6) 過酷な自然現象に対する諧謔的表現に焦点をあてて、それらについて比較と共通性を紹介する。

その結果、気象海象の変化を地域社会特有の伝承的呼称で表現するときのパターンの共通性、過酷な体験を自虐的に表現しようとする傾向という共通性、さらに顕著な現象に対しては、その現象の背後に擬人化あるいは遠方の場所や人を意識するという共通性が見出された。一方、違いは、おもに地理的条件の違い、気象・海象条件の違い、言語的特性の違いがおもなものである。しかし、それらを除くと人間本来の自然認識パターンでの共通性を見出すことができる。

*工学部教授（環境システム学科）

1 はじめに

1-1 調査データの概要

筆者は2013年6月から2014年2月までアドリア海沿岸における「自然現象に関する伝承的呼称 (Local terminology concerning natural phenomena)」の調査を行ったが、それ以前の1985年から1995年にかけては韓国東沿岸および日本海沿岸地域の青森から山口県までの住民に対する聴き取り調査を行った¹。

これらの地域の位置は、地球規模の中緯度にあたり、ユーラシア大陸の東と西の縁辺にあたる。そのため、四季に特有の気象変化と海象変化が起こる。温帯低気圧の影響を考えると、アドリア海には地中海低気圧、ジェノバ低気圧、ギリシャ低気圧が発生し、日本海には日本海低気圧、南岸低気圧が発生する。また、ユーラシア大陸からの影響としては、アドリア海には北東の季節風が吹き、日本海には北西の季節風が吹く。さらに沿岸ではこのような気象現象による高波、高潮など顕著な海象が起こる。人びとはこのような周期的に特徴のある自然現象を日常的に体験してきた。そのためにこれらの地域には豊富な伝承的呼称が存在する。

1-2 論文中の表記

本論文ではいくつかの言語が混在使用される。そこで、各地の伝承的呼称は、原則として地域語のままをイタリックで表記する。すなわち日本海沿岸においてはハングルまたは日本語カタカナ、アドリア海においてはおもにクロアチア語で表記される。それぞれには、英語の表記や補足、発音を〔 〕内に併記した。独特のニュアンスを持つフレーズなどは、その地域での表現のままとした。その際には“ ”で表記される。また各調査地点はおもに文末()内に英語名またはクロアチア語名で付記する。

2 伝承的呼称のもとになるコンパス・ローズ

2-1 風の呼称に柔軟に転用される方位の呼称

方位と風の呼称はもともとその方向から吹いてくる風あるいは神話の神々の名前などがもとになっている。やがて、地図上では方位の呼称(羅針図またはコンパス・ローズ: Compass rose)としてこれらの名前が使われるようになったために、地域社会では方位の呼称ともとの風あるいは風の神々の名前とが混用されるようになった。それぞれの地域に古くから伝わる方位の呼称はその方向に該当する風の名称として柔軟に使用されている。

現在の海図には正確な方位が記されるが、近年まで古い呼称が併記されていた。現在でも漁業関係者の使う風名図(Wind name rose)には、古い呼称が使われていることがある。

筆者のアドリア海沿岸の調査から、地域の人びとは方位と風の呼称を天候の変化にも用いて、柔軟な使い方をしていることがわかった(A. Yanai, 2014)。日本海沿岸においても同様の傾向がある。

1 韓国東部沿岸調査は1989年8月に釜山沿岸から江陵沿岸23ヶ所を調査。

2-2 日本の方位の呼称と風の名前

日本の場合をみてみよう。日本では、方位図 (Compass rose) の分割の仕方として、中国から伝わった12方位が使われ、その名称には曆に使われる干支 (Eto: the twelve zodiac signs in Chinese astrology) が当てられている。

この方向と名称を Fig. 1 に示した。

また、易 (Divination by Chinese geomancy) と呼ばれる占いに用いられている方向の名称も使われた。この名称は8方位に一致している。

このような文化的背景のもとで、基本的な4方位を表現する東西南北ということばが一般に普及していた。干支をもとにした方位と易で用いられた名称を方位にあてはめたのである。

さらに風でも使われる東西南北の名称を基準に Table 1 に示した。

日本では方位の呼称である干支を流用した風の呼び方はイヌイ [Inui, 乾] とウシトラ [Ushitora, 艮] が現在も使われているが、それ以外は廃れている。

日本の地域社会では風の一般的な呼称である東西南北よりも、地域独特のさまざまな呼称が数多く存在し、実際に使われている。もちろんこれらの多くは歴史的な呼称も踏襲している。Table 1 の上二段が干支によって示された方向であり、下二段が風の呼称の例である。

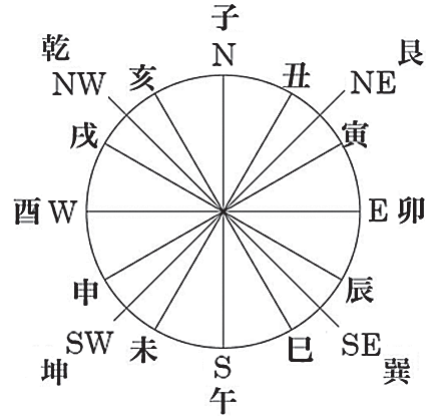


Fig. 1 Japanese traditional direction, by the twelve zodiac signs in Chinese geomancy.

Table 1 Relation between the traditional direction and the azimuth in Japan.

	N	NE		E	SE		S	SW		W	NW	
Classical 12-directions	子 Ne	丑 Ushi	寅 Tra	卯 U	辰 Tatsu	巳 Mi	午 Uma	未 Hitsuji	申 Saru	酉 Tori	戌 Inu	亥 I
Cardinal directions (Oriental Zodiac)	坎 Kan	艮 Ushitora		震 Shin	巽 Tatsumi		離 Ri	坤 Hitsuji-saru		兌 Da	乾 Inui	
Cardinal directions	北 Kita			東 Higashi			南 Minami			西 Nishi		
One of the traditional pronunciation	北気 Kita-ge			東風 Kochi			南風 Hae			西気 Nishi-ge		

さらに地域による違いも数多くある。日本全国各地の風の名前に関してはSekiguchi (1985) による事典が多く情報を提供してくれる。

方位の呼称も含めて日本海沿岸での風の標準的な伝承的呼称は、コチ [Kochi: E wind]、ニシ [Nishi: W]、ミナミ [Minami: S]、キタ [Kita: N] とそれぞれ方位の呼称と併用されているが、その他に風そのものの呼称として、ヒガシゲ [Higasige: E]、ニシゲ [Nishige: W]、ハエ (ミ

ナミゲ [Hae,(Minamige): S]、キタゲ [Kitage: N]、ヒカタ (シカタ) [Hikata,(Shikata): SW]、アナジ [Anaji: NW]、アイ (アイゲ) [Ai,(Aige): NE] などがある²。しかし、これがそのまま各地に普及したわけではない。その中で日本海沿岸では、風の呼称は方位の呼称とあまり混用されてこなかったために地域特有のさまざまな独特の風の呼び方が見出される。

2-3 地中海沿岸の特徴

一般的に地中海沿岸では、方位の呼称すなわちコンパス・ローズと風名図 (Wind name Rose) が明確には区別されない傾向がある。この理由は海図の発達した地中海という航海史からの理由が考えられる。すなわち、異なる文化の交流が盛んだったために、方向の正確な地図と統一用語が必要であり、見る基点となるいくつかの海上地点から陸の目標地までの方向がむしろ重要であったことがわかる。この航路の方向を助ける方位に関していえば、いち早く「標準化という考え方をつくりだし、各地に広まった」と考えられる。しかし、コンパス・ローズに示された呼称が風の呼称としても使われていくうちに地域の地形や風の特徴のほうが重視され、次第に風の呼称が方位から離れていくことになった。

現在、地域で使われている方位の呼称は風を意味している場合が多いと考えられる。例えば、トラモンターナ (*Tramontana*) が北という方位という認識よりは、その場所から見える北方向の山から吹く風と理解して使用する地域が多い。もちろん、調査では注意深い聞き取りが求められるが、方位として語っている場合と風そのものを語っている場合を区別することは不可能ではない。

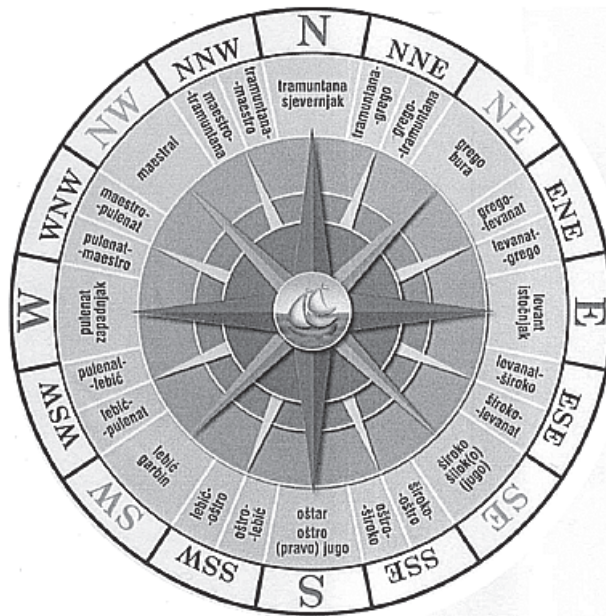


Fig.2 Compass rose for the Adriatic sailor.
Vučetić, M.i V. Vučetić, Vrijeme na Jadranu: Meteorologija za nautičare, Zagreb, Fabra 2002.

2 江戸時代の「津田家文書」(京都府舞鶴市、津田啓年氏所有) から矢内要約。

現在、アドリア海を航海する関係者に示される方位の伝統的な呼称は、Fig.2のようになっている。一方、アドリア海における風の代表的な伝承的呼称はFavroら(2007)によるとNNEからENE風の*Bora* (*Bura*)、ESEからSSE風の*Sirocco*、WNWからNW風の*Maestral*、S風の*Ostro*、SW風の*Lebeccio*あるいは*Garbin*、W風の*Ponent*、NからNW風の*Tramontane*、E風の*Levante*であるという。このことから多くが風の呼称として使われていることがわかる。

その中でもとりわけ良く知られた風が局地風である*Bora* (*Bura*) と*Sirocco* (*Jugo*) である。

Bora (*Bura*) はディナル・アルプス (Dinaric Alps) 山脈から吹き降りる北東からの低温の風である。*Bora*はイタリア語、*Bura*はクロアチア語で、アドリア海のイタリア側では*Bora*、東側のいわゆるダルマチア海岸地域では*Bura*といわれる。*Bora* (*Bura*) がとくに顕著に見られるのは、クロアチアのダルマチア海岸北部のリエカ (Rijeka) から中部のスプリト (Split) あたりまでである。イタリアでは*Bora*はヴェネチアの東のトリエステ (Trieste) で体験される。

クロアチアで呼ばれる*Bura*ということばの語源や語感については諸説があり、Poje (1995)によると、*Bura*は「叫び声」に似ているその風の音に由来するというGluhak (1993)の説を紹介している。また、*Bura*そのものが「邪悪な風」と巷間 (スラブの民間伝承) でいわれることもある。

3 ボラ (ブーラ) に関する諸研究

Yoshino (1969)によると、「『ボラ』はギリシャ語のβορεα、すなわち北風を意味する語に由来する」と紹介している。

このYoshinoの分類によると、ボラには低気圧性のボラと高気圧性のボラがあるといい、「低気圧性ボラとは、イタリア半島中部に低気圧 (ジェノバ低気圧) があって、低気圧循環系の中にこの地域がおおわれている場合で、風速は最も強く、気温は低く、雲量が多い。低気圧の南側では、同時にシロッコが吹いて暖気が吹き込んでいる。この低気圧性ボラは*Bora scura*と言う」(括弧内は筆者)。

一方、高気圧性ボラは「中央ヨーロッパに高気圧があって、寒気がハンガリーや南ロシアからバルカン諸国地域を越して、アドリア海沿岸にやってくる気圧配置の場合である」と解説している。高気圧性ボラは*Bora chiara*という。

クロアチアでの本格的な研究は19世紀末に始まっている。

Grubisic およびOrlić (2007)によるモホロビッチ (Andrija Mohorovičić, 1857-1936) の業績紹介では、19世紀末にモホロビッチはブーラ (*Bura*) の発生時にバカル (Bakar) 湾の上空に特徴的な雲ができることに着目し、山麓から海側に風が吹き降りるときに上空に対流渦が形成され、雲が停滞することを目視観測から確認している。これはブーラが発生するときのボラ現象 (Bora event) 特有の雲とされるものである。この現象は現在では、Terrain-Induced Rotorとよばれている (Doyle, J. D. etc, 2004)。

モホロビッチの宏観的な観測による「ボラ現象」を要約すると以下ようになる。

- 1) 静止していた積雲がバカル湾の先端に進んでくる
- 2) 上空の層積雲が散り散りになり、強い北東の流れで動いて上空は曇った状態になる

3) 積乱雲からの小さな断片は山麓を降りながら、消滅する。

今日では精密な数値計算によってメソスケールのボラ・イベントの解析が進み、ブーラによるローター雲 (Bura rotor) が再現されているが、120年以上前のモホロビッチの目視観測はその結果を先取りしている。

1990年以降、さらに精緻な気象力学的分析が行われ、ボラの観察や測定、モデル化により大きく理解が進んでいる (Grisogonoら、2009)。例えば、ボラは山から吹き下る熱力学的に駆動される強風であり、顕著なボラが吹く場合には、その流れは山の存在によって剥離 (碎波) を起こすなどである。

一方、ボラ (ブーラ) の吹き降ろす海面における大気海洋相互作用に関する解明は、研究途上である。また、ブーラの風下の乱流構造についてもダルマチア海岸特有の島の影響も含めて、研究が進められている。例えば、Klaićら (2003) は激しく吹くブーラの気流が海面にあたり、さらに跳ね上がる現象 (流体工学の実験などでは良く見かけるハイドロリック・ジャンプ現象) が実際にも起こっていることを示し、このような現象がダルマチア海岸特有の地形と密接に関係していることを明確に示している。

このようにブーラすなわちボラは多様な姿を秘めている現象である。その証拠に伝承的呼称の観点から見たとき、イタリアには *Boraccia*、*Borino* あるいは、*Bora scura*、*Bora chiara* など³ の呼称が存在し、ボラの多様な姿を表現しようとしている。

ボラ (ブーラ) は乾燥した低温の風であるのに対して、シロッコは南から吹く高温多湿の風で、好対照の存在である。このシロッコ (Sirocco) は、ダルマチア沿岸ではむしろユーゴ (Jugo) という呼び方が一般的である。

地中海の海域全体でみると、イタリアでシロッコと呼ばれる南よりの風はアフリカの北部海岸では埃まみれの乾燥した諸現象を引き起こすが、この風は地中海海域に高温多湿の強風をもたらす、さらにヨーロッパ大陸南岸にまで達すると蒸し暑さと雨をもたらすという特徴がある。また、アドリア海に限ると、高温の湿った風という特徴を内包している伝承的呼称がユーゴである。

クロアチアの漁業関係者が使ってきた用語を辞書に編纂している Vidović (1984) によると南をあらわす jugo という言葉はセルボクロアチア・スロベニア系の言葉であるという。クロアチアの共通語では jugoistok (南東) や jugozapadno (南西) が一般に使われている。しかし、沿岸地域ではもっぱらユーゴという呼称が一般的で、ユーゴはアドリア海沿岸に吹く南からの代表的な局地風で、シロッコと区別されることが多い。さらに、ユーゴは沿岸に高波をもたらす、高温で湿度が高いために不快な風として嫌われることが多い。

一般的にはアドリア海北部と中南部でみると、ブーラは北部で発生し、ユーゴは中南部で発生する。さらに、ユーゴは海岸線に沿って吹き、ブーラはディナル・アルプス山脈を越えて海岸線にはほぼ直角方向に吹く。

また、Lisacら (1999) によると、アドリア海沿岸の場所によってはブーラとユーゴの発生は南ヨーロッパの移動性低気圧や気圧配置の変化によって、多くの場合連動すると述べている。

気象学の分野では、このユーゴも Ciklonalna jugo (低気圧性ユーゴ) と Anticiklonalna jugo (高気圧性ユーゴ) に分けて現象が理解される。

3 これらについては調査結果とともに後述される。

4 低気圧性ブーラ／ユーゴと高気圧性ブーラ／ユーゴの典型的地上天気図

1988年発行のユーゴスラビア海軍水路部資料⁴にブーラとユーゴが発生するときの典型的な地上天気図パターンが紹介されているのでFig. 3-A、3-B、3-C、3-Dに示す。

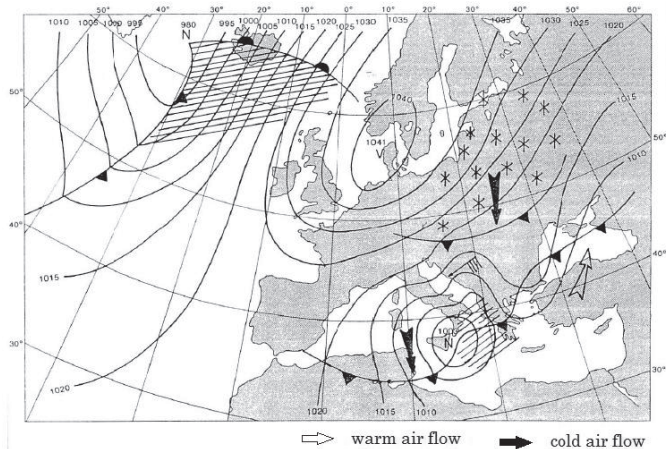


Fig.3-A Sinoptic weather chart, Anticyclonic bura pattern, 1 Dec. 1983, 0700.

White arrow shows warm air flow. Black arrow shows cold air flow.

Strong cyclone from Tunisia has been moved to near Sicily. At that time anticyclone has expanded to the south from the European continent side. As a result, it blows strong winds accompanied by cold towards the Adriatic Sea.

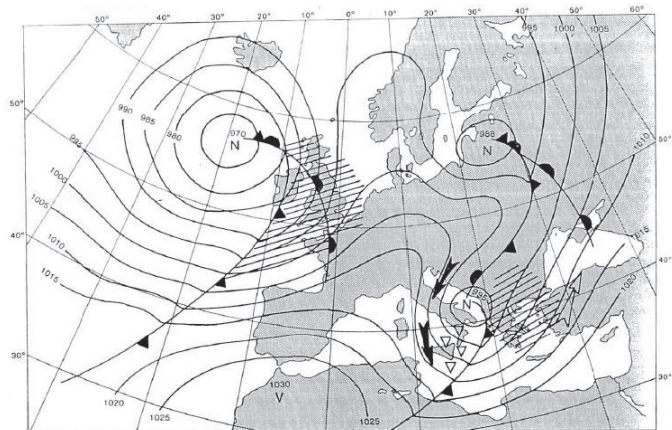


Fig.3-B Sinoptic weather chart, Cyclonic bura pattern, 31 January. 1983, 1200.

Denovsk cyclone that rapidly developed in the Azores Islands, passes through the center of the Adriatic Sea from the southeast. At this time, the low pressure moves to the east and develops in the UK and Northern Europe. Then, it will be cold rainfall in the Adriatic Sea.

4 Hidrografski Institut Jugoslavenske Ratne Mornarice (1988) Peljar za male brodove, Jadransko more - Istočna obala, Dio 1, Split, 19-22.

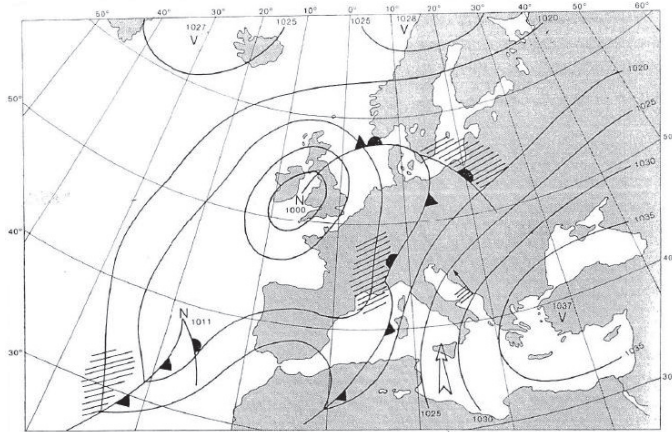


Fig.3-C Sinoptic weather chart, Anticyclonic jugo pattern, 29 Sept. 1976, 0100.
South wind Jugo blows in the Adriatic Sea under the influence of strong high pressure in the Turkey peninsula and the east of Aegean Sea. The weather is stable in southeast Europe and the eastern Mediterranean.

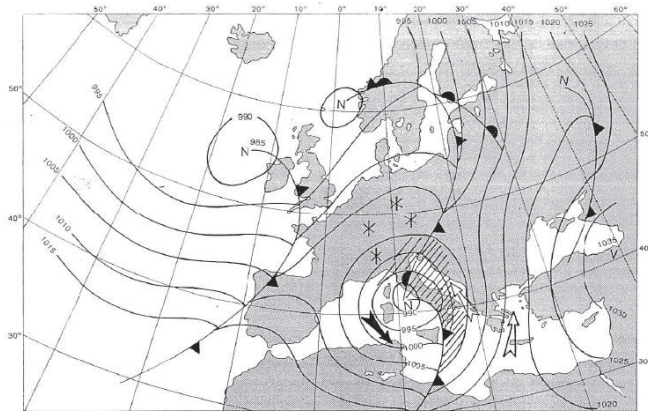


Fig.3-D Sinoptic weather chart, Cyclonic jugo pattern, 22 Dec. 1983, 0700.
In the Adriatic Sea, deep trough of pressure is formed by the Genoa low pressure. As a result south wind jugo blows.

ブーラとユーゴは、局地的な特徴は各地で異なるが、その影響する範囲を考えるとアドリア海の多くの地域で同時に体験をする現象といえる。さらに温帯低気圧の通過や大陸の高気圧の張り出しなどが原因となるために、地域の人びとは典型的なこれらの現象を1年に数回は体験してきた。しかし、ブーラやユーゴの特徴と体験は場所によって少しずつ異なる。そのため、伝承的呼称の意味内容は、各地で微妙に違う表現とともに違う観察や体験を包括している。

アドリア海における伝承的呼称と気象・海象とのかかわりについては前出のVidvić、あるいはPenzar (1997)の研究があるが、日本海における日本人の環境認識とアドリア海におけるクロアチア人の環境認識を比較し、自然現象と人間とのかかわりから共通性を論じる研究は筆者の取

り組みが始めてである。本論文では代表的なブーラとユーゴを中心に紹介する。

5 伝承的呼称の表現パターンによる共通性

5-1 方向を正確に表現するための方法

基本的な4方向あるいは8方向の風の名前が定まれば、その間の方向から吹く風に対しては、SとEの中間の風というような表現ヴァリエーションをつくりだすことができる。この方法は日本海においてもアドリア海においても同じである。

Fig. 2で示した方位の呼称は基本的に8方位である。この8方位からさらに詳細な16方位をつくるために、Nの*Tramontana*とNEの*Bura*を組み合わせ、NEを*Bura po tramontani*、ENEを*Bura* (NE) と*Levant* (E) から*Bura po levantu*と表現している。あるいは、Sの*Oštro*とSWの*Lebić*を組み合わせ、SSWの*Oštro po Lebić*という表現をしている。このような使用例は他にESEを表現する*Južni levant* (Šibenik) がある。

同様の表現方法が日本でもみられる。ニシ [Nishi : W] とアナジ [Anaji : NW] の間のWNW風をニシ-アナジ [Nishi Anaji] と表現したり、キタ [Kita : N] とアナジ [Anaji : NW] との間のNNW風をキタ-アナジ [Kita-Anaji] と表現したりする。

ただこの方法は地域社会が生み出したのではなく、地図の方位の名称として伝わった方法を利用したと思われる。なぜなら古い航海用の地図⁵に記されたWind Roseの中には32方位のものもあり、そこではこの表現方法が使われているからである。

日本海とアドリア海を比較すると、この方法は32方位まで方位の名称を定めて利用した地中海沿岸地方のほうが厳格である。しかし、これは当初はあくまでも地図の方位の名称であり、風の名称とは異なっていた。このような表現が方位と関係なく使われる場合には、地域でたまたま中間方向から吹く風の名称がないときであり、この方位の名称が汎用的に風の呼称として使われることがあると考えるべきだろう。

多くの場合、人びとにとっては、地域風の観察では8方位が使えれば実用に支障はない。

5-2 現象変化に対する表現の変化パターン

人びとが気象現象にともなう風や雨、波あるいはその他の現象を体験するとき、当然ながら人間の感覚機能が働き、そのようすを感知する。いわゆる宏観的観察である。そのとき、とりわけ強い刺激を受ける感覚器官がある。それは視覚による空模様の変化であったり、皮膚感覚による大気の寒暖や乾湿であったり、聴覚によるエオルス音や海嘯であったり、嗅覚による季節動植物の気配であったりする。さらにそのときの雰囲気、不気味さ、不安、不思議さなどはすべての知覚機能を統合した感覚として認識される。

このような情報からとくに必要な変化に注目して強く印象に残っている感覚刺激に関することは基本的な伝承的呼称に付加され表現が変化していく。

5 The Malta Map Society, Glossary of terms useful for the detection of maps. (Lafreiri atlases/ IATO atlases.) <http://maltamap.jakedalli.com/>

(1) 天候表現の共通性

*Škura bura*は*Bura*という風がもたらす悪天候を意味しているが、その情景を*škura* (dark : 暗い) で表現している。つまり天候が悪く、雲が空一面を被うような情景を表現している。

同様に日本でもハエ [Hae: south wind] という風によって同じような天候になるときに、暗いを意味する黒 [Kuro: Black] という接頭語を付けた天候表現にしている。また、天候の良いときの表現に黒の反対語である白 [Shiro: White] あるいは晴天のときの空の色、青 [Ao: Blue] をつける。天候の良いときのイタリア語の表現としては、*Bora ciara* [澄んだボラ] が知られている。これらの傾向について、さらに詳細に2013年の調査で得られた変化パターンからみてみよう。

一般に低気圧性ブーラの場合には天気が悪く、高気圧性ブーラや夏の弱いブーラでは比較的天気良く、清々しいとされる。

Škura bura (Each place)、*Scura bura* (Betina, Split) は「暗い*Bura*」という呼称で天気の良いときの*Bura*をさす。この*Bura*による海象としては、激しい突風による顕著なステープネスの風波を生じさせる。同様の天気の良いときの北風を日本海では、クロキタ [Black Kita-wind] という (Kyoto Pref.)。また、とくに雨の降り方に注目してこの風を表現するものに、*Šporka bura* (Split) がある。*šporka*は汚れたという意味のイタリア語*sporca*に由来し、雨で汚れる*Bura*という表現である。日本海でも同様の体験から、ジュルキタ [Juru-Kita: Juru=An onomatopoeia for wet/durty] がある (Western Japan)。

一方、天候の良いときの*Bura*の表現に、*Čista bura* [Clear bura] がある (Split)。日本海でこの状況に対応するのがアオキタ [Ao: Blue, Ao-Kita means blue sky and north wind.] である (Western Japan)。

南よりの風に関しても同様の表現パターンが両沿岸地域に見出せる。*Jugo*の場合には、低気圧性ユーゴは雨模様で高温多湿となる。また、高気圧性ユーゴや吹続時間の長いユーゴでは天気は比較的良いが、高温多湿傾向が著しく、また沿岸にはうねりが来襲する。

雨をともなう不快な高温の南東風に対して、*Gnjilo jugo* (*Rotten Jugo*) があり、汗臭いようすを表現している (Split)。これに対応する日本海沿岸での表現に、ドロバエ [Doro means muddy]、ミズバエ [Mizu means wet condition caused by rain.] がある (Western Japan)。一方、地中海の広範囲で*Scirocco*といわれる南風と同様の吹続距離の長い*Jugo*に関しては、天気の大きな崩れはないものの高温多湿の風が吹き続いたためにうねり (長周期の高波) に見舞われることもあり、さらにアドリア海沿岸の人びとにとっては、肉体的にも精神的にも影響の起こる風として、*Jugo*の変化表現が使われる。この悪天候にならない*Jugo*を沿岸各地では*Vedro jugo* [Vedro means clear *Jugo*. クリアなユーゴ] という (Each place)。同じ表現にイタリア語に由来すると思われる*Čiara Jugo* [Čiara is derived from the chiaro of Italian. クリアなユーゴ] がある (Split)。この晴れたときの風に対しても日本海沿岸に同様のパターンがあり、シロハエ [Shiro-Hae, Shiro means white color in Japanese.] がある。前述の晴れた空をアオ (Ao: Blue) と形容詞をつけるのと同じパターンで天候が表現される。

このことから、アドリア海の人びとの表現と日本の人びとの表現パターンに類似性が見出せる。むしろ天候の視覚的表現に関しては偶然以上に対応しているといっていよう。

(2) 風の強弱表現の共通性

日本では南風をハエ [Hae] というが、この強風をオオバエ [Oo-Bae, Oo-Hae] という (Western Japan)。このように対象の風が強くなった場合、大きいを意味するオオ (Oo) や 強調語としてド (Do!) をつけるなどをして、風の強弱表現とする。この表現パターンは、その他の風の呼称に対しても適用され、日本の沿岸各地には多くの事例がある。Table 2 にその代表的なものを挙げた。

**Table 2 Expressions concerning “strong” or “weak” wind at the Sea of Japan
(The representative example).**

Wind name	Strong	Direction	Region (Pref.)
	wind name		
アイ (Ai)	オオアイ (Oo-Ai)	NW-NE	Niigata Pref. Toyama Pref.
ダシ (Dashi)	オオダシ (Oo-Dashi)	SE	Niigata Pref.
クダリ (kudari)	ドクダリ (Do-Kudari)	SW	Niigata Pref.
ニシ (Nishi)	オオニシ (Oo-Nishi)	W	Shimane Pref. Fukui Pref.
ハエ (Hae)	オオバエ (Oo-Bae)	SW-S	Shimane Pref. Yamaguchi Pref.
コチ (Kochi)	オオコチ (Oo-Kochi)	E	Yamaguchi Pref.

Table 2の事例にあたるダルマチア沿岸における例としては、*Mala bura*、*Sredja bura*、*Jaka bura*、*Orkanska bura*がある (Crikvenica)。*Mala bura*は弱い*Bura*、*Sredja bura*は中くらいの強さの*Bura*という意味である。*Jaka bura*は強い*Bura*という意味であり、さらに強い場合には*Orkanska bura* (Orkanskaはハリケーンと同義) という。このように日本海沿岸と同様の形容詞をつけることによって風の特徴をきめ細かく表現しようとしている。また、Zadarでは、*Jugo*に対して*Olujno Jugo* [Olujno is stormy in English.] という表現があり、嵐のユーゴという意味であるが、これは日本のハエアラシ [Hae-Arashi, Arashi means atormy.] が対応する。

弱い現象に関する変化形はダルマチア沿岸では数多くみられる。しかし、詳細にみるとクロアチア語の場合は接尾語の変化型—小さいを表現するときに“...in”などを付けて単語そのものが変化するなど—が変化表現のパターンになる。これはセルボークロアチア語が南スラブ言語の特徴である屈折語 (inflectional language)⁶であることに関係している。

言語特性の比較から補足すると、日本語は膠着語 (agglutinative language) であるために日本海沿岸では接尾語による変化形は (筆者の調査では) ほとんど見られない。

(3) 海象表現に関する共通性

波の状態に関する表現も日本とダルマチア沿岸での類似性がうかがえる。

風浪が起こって、海面に白波が見えるときに *Ovčica*、*Pilasti*、*Stupi* (Crikvenica, etc.) という

6 屈折語 (inflectional language) は、言語学上における形態論上の分類のひとつ。文法的機能を表す形態素が「語」の内部に分割できない形で埋め込まれる。

表現が使われる。*Ovčica*は白波を羊に例えて海面を走り回る羊を連想している。*Pilasti*はのこぎりの歯、*Stupi*は柱のように尖った波という表現である。さらに白波 (White cap) をニワトリのトサカ (鶏冠) にあたる *Pivac* (ダルマチア方言: チキン野郎) とすることによって、臆病者 (たいしたことはない波) というニュアンスを感じさせる表現もある (Betina)。

日本での類似した表現として、ウサギ波 [Usagi-Nami, Usagi means rabbit.] がある。海面をウサギが飛び跳ねるように白く見えるということから名づけられたものである (Shimane, Tottori Pref.)。この波は5月初旬から6月下旬に発生することが多く、日本の雨期 (Tsuyu, Baiu) でもあるために、ツユ波 [Tsuyu Nami, Tsuyu means the traditional name of the rainy season in Japan.] ともいわれる。弱い雨と弱い北東風のときに海面の波がうさぎの耳のように見えて、静かに岸に寄せる光景であるという。

Table 3 に波の表現に関するアドリア海と日本海沿岸との表現パターンの対応を示す。

**Table 3 Representation for the surface conditions of the sea:
The corresponding terminology between the Adriatic Sea and the Sea of Japan.**

Ocean condition	The Adriatic Sea (Croatian) <i>Term</i> : English (place name)	The Sea of Japan <i>Term</i> : English (place name)
White cup by wind waves	<i>Ovčica</i> : Sheep (Crikvenica, etc.) <i>Pilasti</i> : Sawtooth (Crikvenica, etc.) <i>Stupi</i> : Pillar (Crikvenica, etc.) <i>Pivac</i> : Cockscomb (Betina)	ウサギ波 : <i>Usagi-nami</i> , Rabbit (Western Japan)
Spray from waves	<i>Pjeni</i> : Foam (split) <i>Refuli</i> : gusty (Zadar) <i>Reful</i> : gusty (Šibenik)	スブキ波 : <i>Shubuki-Nami</i> , Sprey (Niigata Pref.) ゾエキ : <i>Zoeki</i> , <i>Zoeki</i> is unknown. (Fukii Pref.)

(4) 地名を使うことで得られる地域愛と優越性、実利性

人びとが風の呼称に場所名を付けて共有する意義はいくつかある。

まず、正確な方位を得られること、つぎに地域の人が良く知っている地名を使っていれば、親しみやすく覚えやすい。すなわちその現象が表す内容を共有しやすいこと。さらに、その地域固有の地名が入った呼称をつくるという行為がかつて為政者の行った命名権を行使する優越感をもてること、そして最後に、郷土愛につながるということがある。

アドリア海には地名を交えた伝承的呼称が多い。そのおもな理由は正確な位置や方角を定めるときにランドマークとなる地名を利用するメリットがあったためと思われる。とくにダルマチア沿岸には島が多い。さらに古くから海上交通が発達していたアドリア海では、島から突然吹く風から船を非難させるために島々が利用された。あるいは外敵の攻撃から避難するためにも島の入り江や島陰が役に立った。このような航海術は歴史が古く、帆船時代から行われていた。

Penzar (1997) によると、フランスの海洋研究者 Beautemps-Beaupré (1766-1854) はアドリア海の東岸 (ダルマチア沿岸) を帆船で航行するときの航海術として風の呼称の重要性に言及しているという。ブーラはその突風と比類のない激しさのため最も危険な風であるが、「ブーラはアドリア海で最も強いが、ダルマチア沿岸には無数の非難場所が提供されており、航海者はそ

こまでのナビゲーションによって船を係留することが可能である。また、ユーゴは、高波と雨による視界不良をもたらす。その場合にも適切な避難地を見つけることができる」という彼の見解を紹介している。

このようにアドリア海を航行する船乗りは無数の島の位置を覚え、実際に停泊地として利用していたのであるから、このようなときに風や天候に地名を冠した多くの親しみやすいことばが役立つに違いない。

*Bura*の前兆を表現する伝承的呼称にはヴェレビット山 (Mt. Velebit) が大きな役割を果たす。これはこの山がアドリア海沿岸の人々にとっての象徴的な山であり、このよく知られた山に関する呼称であれば、広く親しまれることになる。

日本や韓国にも地名が含まれた伝承的呼称があるがその意図は若干違うようである。

韓国語の風は바람 (Baram) であるが、その他に風を表現するために「もの」を意味する 내기 (Naegi)⁷や大気のみ (Gi)⁸を用いている。日本においてはモン (Mon: Mon means a humanbody, Bastardization from *Mono*) を用いることが多い。수영강내기 [Sueonggang-naegi、水營江の風] は、水營江の河口から海に向かって吹き出るきわめて寒い風であるが、この風の名前には寒いというニュアンスよりもその寒風そのものを擬人化して「寒さをもたらす風の人 (野郎) が来る」というニュアンスがある。また、東風を 일본바람 [Ilbonbaram、イルボンパラム: 日本風]、北風을 원산내기 [Wonsannaegi、ウォンサンネギ: 元山もの] という地域がある。前者は、東の方向の日本を指し、日本からの風ということになる。後者は、원산 (Wonsan) という寒い場所とそこに住む人という意味が込められている。

このような表現の類似例として、アドリア海での表現: *Boduli* ["Boduli znači otočani": 島に住む人々] がある (Opatija)。

日本の場合には、オヤマモン、ダイセンモン、エッチュウモン、トヤマモン、タテヤマモンなどがあるが、これらの呼称には遙か彼方の遠くの地あるいはそこに住む人を思う心情が込められているようである。

風は元来、風の来る方向が文物をもたらす先を意味していた。さらに情報や先進文化や異文化をもたらす異国を想像させた。あるいは都合の悪い風 (寒風や強風、嵐など) を発生源と考えた場合、その場所をうらむ心情なども含まれるであろう。そのような多様な意味を地名や住むひとの名前を風の呼称に充てたと考えることができるだろう。

中世の地中海地域のコンパス・ローズに *Afriko* や *Greko* の呼称がある。前者はアフリカから、後者はギリシャから吹いてくる風を指している。このような命名の発想は似かよっている。

(5) 自然現象の擬人化

日本の場合には前述のように風の代わりに「者 (もの)」ということばを使い、風そのものを人と同列にしていた。風を直接的に擬人化している。「…モン」(…Mon)、「…モノ」(…Mono) という表現の風の伝承的呼称は著者の調査でも 46 種類がある⁹。

7 내기(Naegi)は(場所を表す言葉に付いて)「その人、またはその特性を持っている人」を示す。(一部の語根や接頭辞に付くと) そのような「人」を甘く称える言葉。

8 기(Gi)は、①生活や活動の源となる力。②呼吸時に出るオーラ。③東洋の哲学では万物の生成のもととなる力。

9 日本海沿岸調査ではモンのついた風の名前は 13 地域に見出された。

Pulentac と呼ばれる風は別名、*Burin Otac* [The father of Bura] というが、この風は、その後、強風と時化がやって来ることを予測する前兆風をさしている (Betina)。低気圧の移動とともに暴風雨がやってくる時、その地域では風向が順方向あるいは逆方向に変化しながら次第に風速が増してくる。このときの兆候となる風を「嵐 (*Burin*) の生みの親」とみなす考え方である。

このようなとらえ方は日本にもオヤカゼ [Oya-Kaze: 親風] がある (Niigata Pref.)。このときは嵐に至るときに最も強い風を「(一連の風の中の) 親の風」とみなす。

Burin Otac は強い風の生みの父、オヤカゼは強い風そのもので、これらは直接的に風を擬人化している。しかし、日本の場合にはこのような風の擬人化は多くはない。一方、アドリア海沿岸ではギリシャ・ローマ神話やスラブ神話の世界に親近性があるためか、自然現象をさまざまに擬人化して寓話の中で登場させている傾向がうかがわれる。

(6) 過酷な自然現象に対する諧謔的表現

擬人化表現のもう一つの特徴はユーモアあるいはブラックユーモアを含んでいることである。その面白みと諧謔さにはダルマチア沿岸と日本海沿岸とでは微妙に違いがあるが、深層心理では通底しているところがある。

沿岸に住む人びとは自然の恩恵をおもに漁によって得ている。一方で激しい嵐に遭遇すると身の危険にさらされることになる。あまりにもシビアな危険を体験した人たちは、その体験を地域の未体験の人に伝えようとする。その伝え方には二通りがあるようである。

ひとつは未体験者に同じような危険に遭遇した場合に如何に危険を回避したらよいかを真に迫った情報で伝えようとするやり方である。

もうひとつはあまりにシビアな危険体験である故に深刻な情報として伝えない。むしろユーモラスな体験として伝えようとする傾向である。この心理は地域の人 (とくに家族) に無用な不安を与えないという配慮でもある。

Bura はときには人智を超えた現象といわれることがあり、そのときの強風や海況は極めて危険である。このときの擬人化 (あるいは神格化) にはどこか諧謔性がある。

さらに、漁業は基本的に男社会であるため、このときのような独特のユーモアやブラックユーモアによって彼らの符丁や台詞で味付けされることになる。

“Neka te bog sačuva škure bure, vedrog juga i stare cure.” (暗いブーラと明るいユーゴには気をつけなさい)

“Dabog dajti beli vali grob bili” (ブーラの白波が墓場になるだろうよ)

“Puše ka na pirju” (When it is lot of rain, they say “Rock’n Roll”.) これは船上で激しい風波に翻弄されるようすをいう。

“Iz Babine Guzice bi Izvukao Kišu” (おばあちゃんのお尻からだよ)。この台詞は、冬の東よりの風にとまってにわかには雲が広がり、天候が悪化するとき、「あの雲はどこから湧いてくるのだろうか」と言う問いに対するユーモラスな会話である。

“Ne pišaj proti buri” (嵐に向かって放尿をするなよ)

“Ajde pusti je poludila je, vidiš da je jugo” (彼女が変なのはユーゴのせいだよ)、“Za sve je krivo jugo” (すべてはユーゴのせいだよ)。これらはあまりにも不快な南風がもたらす気候を人

びとの奇行に重ねて表現している。

この傾向は日本でも同じで、カカーシラズ〔Kakaa-shirazu、嬬知らず：Wife, she don't know.〕という風の吹くときの波をボウズゴロシ〔Bouzu-Korosshi、坊主殺し〕という（Shimane Pref. in Japan）。極寒の後、早春の比較的暖かい日に沖に出た漁師が、陸とは対照的な冷たい強風と高波に苦しめられて危険に遭遇したときの波と風の表現である。「このような冷たい強風が吹いていることは陸にいる人たちは全く知らないだろう」というニュアンスである。また、ボウズは僧侶またはスキンヘッドという両方の意味がある。どちらも頭の髪の毛を剃っているので、「もし、この寒風にスキンヘッドの人がいたら、頭が寒くて凍えるほどだから、殺されかねないだろうよ」という意味が込められている。さらに同様の天候状況の表現にヨメナカセ〔Yomenakase：Wife lament.〕（Kyoto Pref.）がある。つまり「魚が獲れずにつらいけれど、陸にいる嫁も嘆くだろうなあ」という苦しい生活状況の気持ちが込められている。

このように海での作業が過酷であったにもかかわらず、港に帰った彼らは楽さや諧謔性を込めてそのときの体験を伝えようとするのである。

類似した表現に、“なべ割りキタ”や“一俵ギタ”がある。これらは過酷な自然環境の下で生活に苦勞するようすが表現された風の名前である。同時に「時化が長く続くときには食べ物なくなるので、そのようなときのために普段から食料を備蓄しておくべきだ」という教訓でもある。

漁師や船員で生計を立てることは、陸上で生活する人（例えば、妻や子ども）には想像以上の苦勞がある。それは前述の嵐や寒風ばかりでなく、長期間の航海も含んでいる。アドリア海にこのような心情と生活の苦しさを表現している言い伝えに、

“Kruh sa sedam kora”がある¹⁰（Dubrovnik）。

“Kruh sa sedam kora”は、7つも硬い外皮のあるようなパン、という意味で、古くなった固いパンをかじって暮らさなければならない船乗りや漁村の暮らしの過酷さを言い表している。とはいってもこのような台詞を共有することは過酷な漁業を仲間と共有し、ときには男らしさやある種のプライドに繋がるのである。過酷さと危険を巧妙に伝えようとする知恵がこのような表現に向わせているのであろう。

まとめ

ここまで日本海沿岸とダルマチア沿岸における風土的環境観にもとづく、自然現象に関する伝承的呼称の類似性を天候の晴雨表現の共通性、風などの強弱表現の共通性、海象表現に関する共通性、伝承的呼称に地名を加えることで得られる地域愛と優越性、実利性、そして自然現象を擬人化するパターン、あるいは過酷な自然現象に遭遇した人びと特有の諧謔的表現心理を中心に比較してきたが、これらからうかがえる「自然現象を体験する地域社会の人びとの共通性」をまとめてみよう。

まず、一般に東洋人は自然に対して従順であり、西洋人は自然に対立的であるとよくいわれるが、われわれの調査では、この通説を超越した共通性が存在する。その背景には周期的な現象を体験するという縁海あるいは地中海特有の地球物理的条件が関係している。つまり、沿岸地域の

10 Tomo Perdija says “Kruh sa sedam kora” at Župa Dubrovačka. He is a fisherman, 71 years old. (2013)

人びとは四季の変化、年変化などの周期的な変化を受容していること、さらに沿岸の人びとは短期的な変化を日常のものとして受容していること、などの条件である。短期的な変化には再現周期の短いもの、月オーダーや日オーダーのものに加えてその現象のライフサイクル（影響する時間）の長いものと短いものという2パターンの現象がある。これらのうち短期的な変化に対して地域社会は地域の違いを超越して経験的な知見を豊富にもっている。その結果、異なった地域であっても使われる伝承的呼称には共通性が生まれるといえるであろう。

つぎに沿岸の人々が自然現象の変化を「一連のイベント」としてパターン化して受容していることによる共通性が存在する。本論で紹介した風などは体験される典型的イベントであり、継続する時間は数時間から数日の自然現象が多い。この時間オーダーのイベントやその変化に対しては、経験的知見の結果得られた共通認識が豊富になる。そしてそれは定性的には科学的知見に一致している。

さらに、経験的知見から予測困難な顕著現象（各種の災害につながる稀な強風や稀な高波、その他）に対して、沿岸の人びとは戸惑いつつもある種の楽観的あるいは諧謔的受容をしている。多くの場合、この種の楽観性は「いずれ静穏な気象・海象に回復する」という「現象は繰り返されるのだ」という歴史的経験に由来する。一方、シリアスな体験にもとづいているために楽観性の中に死の恐怖を身近にとらえた真剣さもある。おそらく自然科学の知識で自然現象を理解しようとする人よりも現象を現実味のあるものとして受容し、この心象風景を共有しようとする願望は強いだろう。

最後に現代のわれわれの自然現象に対する認識の手段（感覚機能）が視覚優先であるのに対して、両地域の人びとのそれは視覚とともに皮膚感覚、あるいは聴覚、嗅覚なども動員していることが数々の表現からうかがえる。その理由は、気象・海象現象の中で最も注意が必要な風が皮膚感覚による認識が不可欠だからである。したがって伝承的呼称は皮膚感覚も含めたホリスティック（Holistic）なものとして解釈することによって正しく理解できる。さらに踏み込んで言えば、自然現象に対する認識の手段は、自然の微妙な気配やそれによってもたらされる気分、心象までを含めた感性を含んで統合化されている。このような認識は人間本来の感覚機能の共通性によって成り立っているために、身体的なホリスティック情報としての伝承的呼称は共通するところが多いのであろう。

本研究の調査結果は、人間本来の自然認識パターンの共通性の具体例の一端を示したものと考える。

謝辞

本論文執筆にあたって、クロアチア共和国ザグレブ大学、アンドレア・モホロビッチ地球物理学研究所所長 Zvezdana B. Klaić 博士をはじめ Mirko Orlić 博士、元同研究所 Branka Penzar 博士からの有意義なアドバイスを戴いた。また、ザグレブ大学理学部 Davor Margetić 博士からきめ細かい調査に関するアドバイスとアンケート調査でのご協力を戴いた。アドリア海の漁村における調査では、ザグレブ大学学生の A. Magaš, M. Vulić, V. Roncević, J. Beželj, N. Malčić, I. Hrelja さんにご協力いただいた。多くの学生諸氏の協力が得られたのは日本に留学経験のある Matea Kobeščak さんと武蔵野大学に留学していた Marcela Perić さんの学友ネットワークとザ

グレブ大学哲学部 Hazuki Mori 博士、Kamelija Kauzlarić 先生のご協力によるところが大きい。その他、1980 年からこれまでの日本海沿岸調査にご協力していただいた方々を挙げると極めて多くの方々にお世話になった。これらのすべての方々に深くお礼を申し述べさせていただく。

最後に本研究のアドリア海調査は 2013 年度武蔵野大学海外研修制度によって行われたものであることを謝意とともに記させていただく。

参考文献

- Doyle, J. D. etc. (2004) Terrain-Induced Rotor Experiment, *Scientific overview document and experiment design*, 72pp.
- Favro, S. et al. (2007) Natural Characteristics of Croatian Littoral Area as a Comparative Advantage for Natural Tourism Development, *Geo adria*, 59-81.
- Grisogono, B. et al. (2009) A review of recent advances in understanding the meso and microscale properties of the severe Bora wind, *Tellus*, 61A, 1–16.
- Grubisic, V. and M. Orlić (2007) Early-observations rotor clouds by Andrija Mohorovicic, *MAMS, American Meteorological Society*, 693-700.
- Klaić, Z. B. (2003) Mesoscale airflow structure over the northern Croatian coast during MAP IOP 15 - a major bora event, *Geofizika*, Vol. 20, P23-61.
- Lisac, I. et al. (1999) Wind Direction Frequency Analysis for the Jugo Wind in the Adriatic-Analiza čestina smjera vjetra za vrijeme juga na Jadranu-, *Hrvatski meteorološki časopis*, Vol.33/34 No.33/34, 19-37.
- Penzar, I. and B. Penzar (1997) Weather and climate notes on the Adriatic up to the middle of the 19th century, *Geofizika*, Vol.14, 47-82.
- Penzar, B. et al. (2001) Biblioteka Geographia Croatica, Hrvatski Hidrografski Institut Split, 36.
- Poje, D. (1995) On the nomenclature of winds at the Adriatic, *Hrvatski meteorološki časopis*, 30, 55-62.
- Sekiguchi, T. (1985) 『風の事典』、原書房、in Japanese.
- Vidović, R. (1984) Pomorski Rječnik, Biblioteka Rječnici, Logos in Split, 183.
- Yanai, A. (2005) 風土的環境観の調査研究とその理論、武蔵野大学出版会、in Japanese.
- Yanai, A. (2014) Compass rose of the Mediterranean Sea and the wind name rose of the Adriatic Sea, Bulletin No.4, *Environmental Research Institute of Musashino Univ.*, 47-62.
- Yoshino, M. (1969) ユーゴスラヴィアの局地風「ボラ」に関する総観気候学的・局地気候学的調査, 地理学評論, 42-12, 747-761、in Japanese.